

(様式4)

学 位 論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名 戸 谷 幸 佳 印

(学位論文のタイトル)

Development, Validity, and Reliability of a Japanese Version of
End-of-Life in Dementia Scales.

(日本語版 End-of-Life in Dementia scales の開発と信頼性妥当性の検証)

(学位論文の要旨) **2,000**字程度、**A4**判

【緒言】超高齢社会である日本において、認知症の人は増加の一途をたどっている。認知症は進行性の死に至る疾患であり、その終末期にはエンドオブライフケアが必要となる。エンドオブライフケアの質向上には、認知症の人が受けたケアに対する評価を適正に行う必要があるが、終末期にある認知症の人が主観的にケアの評価を行うことは困難なことが多く、客観的にケア提供者が評価を行う指標が必要となる。米国では、重度の認知症の人のエンドオブライフケアを評価する尺度である、The End-of-Life in Dementia scales (EOLD)が存在し、他言語にも翻訳されている。日本では、がん患者や遺族、医療スタッフがエンドオブライフケアを評価する尺度として、The Good Death Inventory や The Japanese version of the Support Team Assessment Schedule (STAS-J)臨床で使用されているが、認知症の人に特化した評価指標の存在は確認ができていない。

【目的】本研究の目的は、日本語版EOLD (EOLD-J) を開発し、その信頼性と妥当性を検証することである。

【方法】<EOLD-Jの開発過程>EOLDはVolicerらが開発し、①満足度 (Satisfaction with Care at the End-of-Life in Dementia: SWC-EOLD、1因子、10項目、対象遺族のエンドオブライフケアに対する満足度を測定。満足度が高いほど高得点となる)、②症状コントロール (Symptom Management at the End of Life in Dementia: SM-EOLD、2因子 (Physical・Psychological)、9項目、エンドオブライフケア期の認知症高齢者の症状の有無を測定。症状管理が適切であるほど高得点となる)、③安楽 (Comfort Assessment in Dying with Dementia: CAD-EOLD、4因子 (Physical distress・Dying symptoms・Emotional distress・Well-being)、13項目、エンドオブライフ期の認知症高齢者の快適さを測定。快適に過ごすことができているほど高得点となる) の三側面から評価を行う。EOLD-Jの開発過程として、EOLD開発者Volicer氏に日本語版の開発と信頼性妥当性の検証について、許可を得た。邦訳したEOLDを用いて精神科病院でのエンドオブライフケアについて遺族の満足度調査を実施した斎藤らの同意を得て、その内容を基に高齢者ケアの専門家と英語教育の専門家の意見を踏まえ検討し日本の高齢者施設で使用可能な内容に一部改変、プレテストを経て逆翻訳し、Volicer氏の確認・修正を複数回行い承認を得て、作成を行った。

<対象者のリクルート方法>①研究者の縁故から対象施設長に調査を依頼、②①の調査を

行った施設管理者やスタッフより、同様に条件を満たす施設を紹介してもらい、雪だるま式に研究依頼、③群馬県、埼玉県ホームページに掲載された特養・老健の施設長宛に研究協力依頼書を送付、①～③の方法で研究協力施設を募集した。研究対象者は、対象施設でエンドオブライフケアを受け、死亡から3か月以上・2年以内の認知症高齢者の遺族113名とケアを実施した看護職員113名とした。

<信頼性・妥当性の検証>収束的妥当性の検証のため遺族にSWC-EOLD-Jと日本語版Decision Regret Scale (DSR)、看護職員にSM-EOLD-J・CAD-EOLD-Jとshort version of the Quality of Life questionnaire for Dementia (shortQOL-D)の各尺度に無記名自記式質問紙で回答してもらい相関関係を分析した。SM-EOLD-J・CAD-EOLD-Jの構造的妥当性を検証するために、主因子法、バリマックス回転を用いた探索的因子分析を実施した。信頼性の評価は、Cronbach α 係数を算出した。統計解析にはIBM SPSS Statistics24を用いた。SM-EOLD-J・CAD-EOLD-Jの下位尺度のモデル適合性を検証するために、確認的因子分析を実施した。モデル適合性の基準は、Goodness of Fit Index (GFI) and Comparative Fit Index (CFI) 0.9以上, Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) 0.08以下とした。統計解析にはIBM SPSS Amos Version 27.0を用いた。

<倫理的配慮>施設の管理者に対し、書面・口頭にて研究内容を説明、対象遺族・看護職員には同意書と調査用紙の返信で研究の同意を確認した。群馬大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会の承認を得て行った。(試験番号HS2018-199)

<研究期間>2017年4月～2019年12月

【結果】83名(74.3%)の遺族、62名(54.9%)の看護職員から有効回答が得られた。Cronbach α 係数はSWC-EOLD-Jで0.77、SM-EOLD-Jで0.80、CAD-EOLD-Jで0.88であった。SWC-EOLD-Jの総得点はDRS-Jの総得点と有意な相関が確認された($\gamma = 0.504, p < 0.001$)。SM-EOLD-JとCAD-EOLD-Jの総得点はそれぞれshortQOL-Dの下位尺度である陰性症状の総得点と有意な相関が確認された。(SM-EOLD-J: $\gamma = 0.587, p < 0.001$, CAD-EOLD-J: $\gamma = 0.509, p < 0.001$)探索的因子分析の結果、SM-EOLD-Jは2因子構造を示した。「疼痛(痛み)、息切れ、皮膚の損傷、うつ、不安」が1つの因子となり、「恐怖(恐れ)、不安、焦燥(興奮)、ケアへの抵抗」が1つの因子を示した。確認的因子分析のモデル適合は、GFI = 0.854, CFI = 0.885, RMSEA = 0.114となった。CAD-EOLD-Jは4因子構造を示した。サブスケールphysical distressとemotional distressは1つの因子に含まれた。サブスケールのdying symptomの項目である「息切れ、窒息感、のどのゴロゴロ音」が1つの因子となり、「嚥下困難」は単独の因子を示した。確認的因子分析のモデル適合は、GFI = 0.812, CFI = 0.929, RMSEA = 0.088であった。

【考察】本研究において、SWC-EOLD-J、SM-EOLD0-J、CAD-EOLD-Jについて概ね内部整合性と収束的妥当性が確認された。SM-EOLD0-J、CAD-EOLD-Jの探索的因子分析については、EOLDとは異なる因子構造を示し、確認的因子分析では、モデル適合性は基準以下であった。構造的妥当性の検証については、今後更なる検証が必要である。